

1. キリスト教会の信仰

先月(2018年2月)新教出版社から荒井献氏の文集「キリスト教の再定義のために」が出版されました。これは今年米寿を迎えた荒井氏の過去の小論55編を集めたもので、特にキリスト教の再定義を主題にして論じているわけではありません。

実は私はこのキリスト教の再定義という主題に関して、ずっと問題意識を持って歩んできましたので、たまたまこの書の題名に注目しただけのことです。私のささやかな神学人生を通して到達したのは、キリスト教の再定義という思考方法が(キリスト者である私たちにとって)ほんとうに正しい課題の立て方なのだろうかという疑問でありました。

典型的な例を二三あげてみます。まず16世紀に始まった宗教改革の運動が、カトリック教会を正しい伝統からの墮落であると考えて、原始教会の信仰に立ち帰ってそこから再出発しようとしたことがあげられます。しかし歴史的にはそれは決して正しい認識ではありませんでした。実際には組織として誕生したキリスト教会は最初からカトリック教会であったからです。歴史の出発点に戻ってもう一度新しく別な道へ進もうとすることは、既に存在するキリスト教の改革や再定義ではなくて、新しい別の宗教を興すことにはならないからです。

歴史上のカトリック教会の誕生とその後の成長に、人間的な誤謬が全く混入しなかったなどと主張するならば、それは空論でありましょう。しかし同時に、それが聖霊の導きとは無関係であったなどと考える人がいるならば、その人はもはや信仰とも神学とも縁のないただの世俗の人、肉の人でしかありません。

カトリックにせよプロテスタントにせよ、自らをキリスト教であると主張する歴史上の教会はすべて、基本信条(世界教会信条)を受け入れ、その中で聖霊を信じるとはすなわち教会を信じることでであると宣言してきました。「聖なる、普遍的、使徒的、唯一の教会」とは、決して単なる理論上のモデルではなくて、現実の歴史の教会が「聖霊の御業」であるという断固たる理解に他なりません。

しかし実際には、宗教改革が従来の教会の改革から、むしろ既存の教会を否定して新しい教会を再定義するという方向へと展開するに至った、その重圧から逃れ得たプロテスタントの神学者はこれまで稀でありました。「聖書のみ」という主張から人々は、あたかも現実に存在する歴史の教会を否定して、聖書から新しい別な教会を再定義する古典的原型を読み取ることができるという幻想を抱いたのでした。

カトリック教会はこの事実を直視して、第二バチカン公会議から始まった新しい動きを、改革(Reform)という用語を用いずに刷新(Renewal)、しかも現実の歴史の教会の伝統の中での刷新(within Tradition)と呼んでいます。それは「キリスト教の再定義」の明確な拒否表明であると言えることが出来ます。

20世紀の聖書神学の世界では、福音書の様式史研究(Formgeschichte)の成果により、キリスト教は原始教会の「宣教」から始まったという理解が広く受け入れられるようになりました。キリスト教の発端は、イエスについての宗教であって、イエスの宗教の再現ではなかったという理解です。それは19世紀以来の教義学(Dogmatik)から独立した聖書学が、20世紀に咲かせた見事な花でありました。

しかし、聖書学が教義学から独立した学問となることによって、それが原始教会への理解と関心を呼び覚まして、現実の歴史の教会との連続性を持つ「教会の神学」として受け入れられることが、あまりにも稀であるという現実を私は実感してきました。つまり教会の典礼(礼拝)における説教とは無関係な、別世界の学問のように受け止められているということです。そしてそこでは漠然と、歴史の教会を否定してキリスト教の再定義を促す材料が埋蔵されているのではないだろうか、という幻想が囁かれるのです。

2. 学問としての歴史研究

様式史研究の主張する“ケリグマ(宣教)のキリスト”に対して、“歴史としてのイエス”に集中する聖書学者であるシュタウファーに、ここで言及しておきたいと思います。彼が独自の研究によって、歴史としてのイエスを再構成して見せてくれる学問的業績については、大いに高く評価すべきなのですが、それにもかかわらず私はもう一つの別の観点からの疑問ないし躊躇を持つのです。

歴史の教会は、聖書(と聖伝)がその信仰と存立の根拠であると公に宣言してきました。しかしシュタウファーの歴史研究の結果は、(聖書が伝えている伝承とは)「イエスはまったく異なっていた」というものであり、彼はその成果に基づいて再構成されたイエス・キリストこそが教会の(本来の)絶対的根拠であると主張するのです。まさにキリスト教の再定義が、もはや幻想ではなくて現実の神学的課題として、提示されているということです。シュタウファーの歴史研究の結論の一部を、以下に紹介しておきましょう。

新約聖書を産み出した原始教会は、主イエスの復活と召天の直後から、意識的にあるいは無意識的に、歴史のイエスを越えてユダヤ教の宗教的伝統に戻ってしまった。この原始キリスト教のイエス伝承の再ユダヤ化はごく初期の頃から開始されたのである。

イエス伝承がそのような原始教会の再ユダヤ化によって書き換えられて、実際のイエスと大きな相違が生じたことは、これまでの神学では殆ど見逃されてきた。しかしイエス自身の自己宣言は本来は、原始教会の“キリスト論”を支配しているメシア概念とは決して調和しないのである。

その典型的代表者の先頭にマタイ福音書が位置している。ここでは“旧約聖書の成就者イエス”という主題が根本概念であり、語録資料に由来するイエスの言葉がこの精神において変形され、新しい形態で書き直された。それに対して歴史のイエスは旧約聖書の律法に服さず、それを越えた存在であった。彼は律法から多くを取り去り、あるいはそれを相対化した。シュタウファーの歴史研究によって浮かび上がってきたイエスは、実際には旧約聖書の宗教の非神学化、非神話化、非儀式化、解放、世俗化を遂行したのである。

シュタウファーのこのような見解は、純粋に学問的な研究に基づいているのであって、専門的に議論する能力のない普通の信者が素人意見を差し挟むべきものではありません。問題は別のところにあります。

私の話を先へ進める材料として、次にもう一人の神学者から少し学びたいと思います。O.クルマンという新約学者です。

彼は新約聖書に収録されている“使徒の伝承”に注目し、1コリ11:23のパウロの言葉を取り上げて次のように論じています。「わたしがあなたがたに伝えたことは、わたし自身、“主から受けた”ものです。」ここでなぜ「主から」であって「教団から」と述べていないのか。なぜなら彼は幻の中で主から直接に受けたのではなくて、原始教会の仲介を通してこの伝承を受けたと推測されるからである。

これに対するクルマンの説明は以下のとおりです。ここで用いられている“主”という称号は父の右に挙げられたキリストを言い表しており、この主キリストが“使徒の教会のもとで展開するすべての伝承の担い手である”ということである。

更にクルマンはガラ1:12の「人から受けたのでも教えられたのでもなく、イエス・キリストの啓示によって知らされた」をも、このような使徒的伝承として理解します。事実パウロはエルサレムに上ったとき(ガラ1:18)、それはケファから使徒的伝承を受けるためであったに違いないからです。

以上から彼は次のように結論します。「新約聖書は唯一の正当な伝承、すなわち使徒を通して伝達され、“主”という言葉で特徴づけられた伝承を承認するのである。」

3. 啓示とその証し

カトリック教会は教会憲章の中で、代々の時代の司教たちが使徒たちの後継者として教会を牧すると教えています。ここで彼らは使徒ではなくて、使徒の後継者であるということを正しく理解する必要があります。つまり使徒たちの宣教が代々の司教たちによって現代にまで継続するのですが、彼らはもはやそれを“主から”新しく受けるのではなくて、「伝承されたものだけを教える」のです。(教会憲章 25、啓示憲章 4,10 参照)

以上から分かることは、歴史の教会は父の右に挙げられた復活のキリストが新約聖書(および聖伝)の証言する福音伝承の担い手であり、さらにその福音伝承を受け入れる歴史の教会を現在も聖霊を通して牧し続けておられるという信仰によって立っているということです。

啓示憲章はその冒頭で「ここに提示しようとするのは、神の啓示とその伝達についての正真の教えである」と宣言し、続いて第一章で「神と人間の救いについての深い真理がわれわれに明らかになるのは、この啓示によってであり、キリストにおいてなのである。キリストは、すべての啓示の仲介者であると同時に充滿だからである」と述べています。しかし歴史のキリストが啓示の完成者であるということを私たちに伝えたのは使徒たちであって、啓示憲章はこれを「使徒たちから伝えられたこと」と表現しています。

ですから教会の信仰と神学が啓示の中にその基礎を持っているのは、啓示を聞き、また見た人々の証によってであり、私たちに出来ることはただその証に基づいて啓示を与えられ、受け入れ、承認することだけなのです。

このように“信仰の学”である神学は、歴史の教会の“現在の生きた信仰”の上に立っていて、その舞台は教会であります。そこには啓示伝達の担い手である主が生きておられるという固い信仰があります。主キリストは「今おられ、かつておられ、やがて来られる方」(黙 1:3)であり、「一度死んだが、また生きた方」(黙 2:8)であります。

中世以来西欧においては、大学は最初教会との関連において生まれ、神学を中心とするものでありました。ところが近代になって大学が文化の殿堂となり、信仰の場所(教会)の外に立って学問をするようになった結果、神学ではない宗教学や歴史研究が大いに盛んになりました。そのようなわけで今日、神学と一般の学問との区別を知らないで、あたかも時代ごとの新しい学問研究によってキリスト教が常に再定義されるものであるかのような誤解が、教会の内外を問わず広まってしまいました。カトリック教会の Renewal within Tradition(伝統の中での刷新)という第二バチカン公会議以来の方向付けが、一般の信者の間で必ずしも神学的に正しく受け止められていないのはそのためです。

4. キリスト教会の神学

かつて聖書神学を教義学から独立した歴史的な学問として確認するその発端となったのは、ガアブラーの小論文(1787年)であったと言われています。彼はその中で「聖書神学の目的は、聖書の著者たちが神の御業について何を考えたかを述べることである」と書きました。それは当時においては極めて独創的な考え方だったのです。そして今から半世紀ほど前に私は、現代の日本の神学校で、イスラエルの信仰伝承の歴史を学びます。そこで私は、イスラエルの信仰告白的伝承形成の場が礼拝(古聖所での祝祭)であったことを知りました。この伝承形成の担い手である神をイスラエルは“生ける神”として認識しました。預言者エリヤが突然歴史の舞台に姿を表したときの言葉はその典型です。「わたしの仕えているイスラエルの神、主は生きておられる。」(王上 17:1)

もちろん聖書神学にとって、考古学や歴史研究は貴重な背景資料の宝庫です。それらが既に形成され伝えられてきたイスラエルの信仰告白的伝承の背後に迫る重要な研究であることは言うまでもありません。しかしそれによって過去の伝承そのものに変更を加えて、改めて新しい(より正しい)伝承を創り出すというようなことはもはや出来ません。歴史にやり直しはありえないのです。

同様にキリスト教会の神学は、使徒たちから伝えられた啓示を信じ、受け入れ、その啓示伝達の担い手である主は今も生きておられるという信仰の上に立っているのです。ですから、いかなる外部の学問的成果によってもそのキリスト教を“再定義する”などということは考えられません。

20世紀の我が国の教会で育てられた私たちキリスト教信者は、今や聖書の物語はそのまま文字通りには信じられないという常識(?)の中で指導されてきました。周りに誰も本気で信じている人がいないという世界で、宗教とはそういうものだという感覚を身に着けてしまったのです。そこでは「み国が来ますように」という主の祈りも、「からだの復活、永遠のいのちを信じます」という使徒信条も、みなおとぎ話のように受け取られて、あたかも空呪文のようにこれを唱えることにすっかり慣れてしまいました。そのような人々にとってキリスト教の再定義などということは、とっくに卒業した過去の通過点のように思えるかもしれません。

しかし、カトリック教会は違うのです。私は第二バチカン公会議の公文書を読み、ローマ・ミサ典礼書の総則を学んで、今日においてもキリスト教信仰伝承の形成の場がミサ典礼であることを理解しました。そこには歴史の教会に(復活の主から)委ねられ受け継がれてきた確固たる信仰の遺産が保たれていたのです。この信仰の遺産は、ローマ・カトリック教会だけのものではなくて全キリスト教会の遺産であり、歴史の教会、代々の時代のキリスト教を定義する唯一の基準です。

カトリック儀式書「成人のキリスト教入信式」によると、司式者は洗礼志願者に“信仰宣言”を求め、その上で洗礼を授けるとなっています。それはどの形式のものを用いるとしても、常に父・子・聖霊なる三位一体の神への信仰の表明であって、使徒たちから教会に伝えられた啓示に基づいています。

聖書写本への後世の追記として、現在は翻訳聖書の欄外に記載されている使 8:37 は、教会の洗礼式の式文からとられたもので、「あなたが真心から信じるなら、受けることが許されます」となっています。この小論を読んでいるあなたは真心から信じて洗礼を受けたキリスト信者ですか。もう一度胸に手を当てて考えてみましょう。

「わたしは、聖なる、普遍の、使徒的、唯一の教会を信じます。罪のゆるしをもたらず唯一の洗礼を認め死者の復活と来世のいのちを待ち望みます。アーメン。」